

「八右衛門、金森建策、松浦武四郎の「竹嶋之図」について」 杉原 隆

はじめに

竹嶋（現在の鬱陵島）、松嶋（現在の竹嶋）を描いた絵図は、17世紀70年余にわたって竹嶋渡海を続けた米子の廻船業者大谷（屋）・村川家が事業上の必要や江戸幕府、水戸藩等からの要請に応じて作ったものが中心である。

しかし幕末の19世紀にはいり外国船の日本近海出現に伴う国防の必要から松江藩士金森建策や伊勢の学者松浦武四郎に再び「竹嶋之図」とその説明の書である「竹嶋図説」、「竹嶋雑誌」を書かせることになった。そして二人の「竹嶋之図」は天保4（1833）年竹嶋渡海を執行し島の様子を絵図にして帰国した浜田の直乗船頭八右衛門の「竹嶋之図」が根拠になっていることが判明した。また八右衛門の絵図を鬱陵島視察に携帯し直接島の概観と比較して見たが、驚くほど類似していた。幕末から明治初期に大きな存在価値をもった3人の「竹嶋之図」について整理しておきたい。

(1) 八右衛門の「竹嶋之図」

八右衛門とは浜田の松原浦で廻船1艘を所有し、自らも船に乗り組む直乗船頭をしていた人物である。家名は従来会津屋（あいずや）とされて来たが地元の研究者森須和男氏がその著「八右衛門とその時代」（2002年3月刊）で各地の多数の廻船控帳の分析から今津屋（いまずや）が正しいとされている。その後この問題を追求する研究者がいない現状を考慮しこの稿では八右衛門の名前だけの扱いとしたい。彼が後口述したものの抄録である「竹嶋渡海一件記 全」（東京大学附属図書館蔵）によると北海道の松前に向け度々航行する折、竹嶋（鬱陵島）の近くを通り島の物産の豊かさと周辺の魚影の濃さ等からこの島へ渡海する許可を浜田藩へ申し出ている。

当時の浜田藩主は筆頭老中の要職にある松平周防守康任（やすとう）であった。浜田藩江戸屋敷の重臣からは「竹嶋之儀者日出之地共難差極候付」（竹嶋は日本の地と定め難いから）」と竹嶋は止め松嶋にせよとの指示が来たが浜田の家老等との談合の上竹嶋渡航を執行したことになる。なお八右衛門の渡海は竹嶋の物産の獲得でなく密貿易が目的であったとする記録が江戸時代から存在するが現在もそれを確認する資料は見出せない。

天保4（1833）年八右衛門は隠岐経由で竹嶋に渡った。その時の事を記した「竹嶋渡海一件記 全」に「嶋の四面をも一同船ニ而乗廻私所持之磁石を以方角を極細見およひ」、「嶋之次第私自筆ニ絵圖ニ取」とある。その八右衛門が描いたものに最も近いと思えるのが(A)図である。

この絵図は2006年9月国立公文書館の外務省関係資料から、竹嶋問題研究会の船杉力修委員が発見されたものである。絵図内の書き込みによると天保4年7月隠岐国島後の福浦で順風を待ち同月17日出船、21日竹嶋へ入津したこと、8月23日竹嶋を出船し同月27日に石州浜田浦へ入津したこと、この絵図を天保4年11月19日夜入手し持主は権吉とある。八右衛門の研究者である森須和男氏に検閲をお願いしたが、書き込みに「石州浜田入津」とあるから地元の八右衛門等なら「浜田表入津」とするはずで他国者と考えられること、夜に絵図入手とあるのは密航を意識していること、持主権吉は知らない人物で偽名の可能性が大であると思うとのことであった。絵図は島の形状と共にいくつかの場所に「此の濱は西請、長サ十五丁、谷合一ツ、平地有、奥行相不分」のような地勢を表現する記載がある。鬱陵島視察で私はこの絵図を持参し島周辺の岩礁の形状が非常に良く類似することを確認したが、地理学専門の船杉委員は鬱陵島の浜等の形態も正しく認識していると認められた。



(A)図 天保4年の「竹嶋之図」

天保6（1835）年正月3ヶ日に八右衛門から隠岐国島前崎村で渡部円太夫なる人物が写させてもらったというもう一つの八右衛門の「竹嶋之図」がある。

森須和男氏が松江市美保関町鷓鴣（ささき）修一氏が所有されることを知り森須氏が公表された。この絵図には天保4年石州浜田町人金屋清右衛門（八右衛門の父は金屋清助と言ひ、俗に金清と呼ばれており八右衛門も俗にこう呼ばれていたと思われる）が渡海帰帆し翌5年、さらに6年にも竹島に渡ったのでその折この図を写させてもらったと書かれている。八右衛門は従来天保4年に渡海し、それが天保7年に発覚し逮捕、処刑されたときに来て来たが天保5、6年にも渡海していたことになる。天保4年の持主権吉の絵図と比較すると竹島全景や周辺書き込みは類似するが島内の山々の描き方、岩礁の形、方角を示す時「子（北）方請」と「子方受」のような文字の違いも確認出来、それぞれ別の人によって写された絵図であることがわかる。



(B)図 天保6年の「竹嶋之図」

天保6年に八右衛門から写させてもらった隠岐渡部家の絵図と天保4年浜田浦帰帆直後の持主権吉の絵図が若干でも相違することは八右衛門の所持する本図が別にあるということである。なお(B)図は天保6年渡部円太夫が写し、明治4（1891）年恐らく一族である渡部助蔵が譲り受けたと記されている。渡部助蔵は村上助九郎と共に島前の中の島（現在の海士町）の大庄屋を交代で務めている人物の襲名名である。現在所持される美保関の鷓鴣家は、江戸時代当地の庄屋職と共に廻船業、酒造業等を営んでいるがこの絵図を入手した経緯は不明だという。

(2) 松江藩士金森建策の「竹嶋之図」

松江藩の蘭学教授の御用に、金森建策なる人物がおり、嘉永2（1849）年9月に藩主松平齊貴（なりたけ）に「竹嶋之図」1枚とその説明書を意味する「竹島図説」を提出したことが「列士録」という主な松江藩士の経歴や業績を記す記録の内「新番組列士録」に記録されている。この年2月日本海に異国船の来航があり、松江藩は物頭堀尾弥弥、早田彦兵衛が砲兵を率いて隠岐に出陣する緊迫した中での「竹島之図」の提出であった。金森建策は「竹島図説」の方に「島圖は別に一葉ヲ作テ茲ニ附ス」としているが、実は八右衛門の「竹嶋之図」に基づく絵図であることが、今回判明した。金森建策の「竹嶋之図」と考えられるものが4種あるので以下に紹介したい。

まず(C)図は国立公文書館内閣文庫所蔵の「竹島関係文書集成」の内の「竹島図説」に附属させて保存されている2枚の絵図の内の1枚である。島や岩礁の形状は、八右衛門の「竹嶋之図」に類似するが島内の山や樹木の描き方は異なっている。絵図内の書き込みでは「自隠岐国七十里而有此島俗号竹嶋是也」とある他、島の周辺に特色や方角が書かれている。八右衛門の絵図に「此濱西請、長サ十五丁、谷合一ツ、川一ツ、平地有奥行相不分」とあった部分が「濱十五丁谷合アリ、流一、平地アルカ」に変わっている。現在芋洞とよばれる場所については八右衛門の絵図が、「岩組谷合四ツ、流三ツ、干川二ツ、濱長サ廿丁余、卯受」とし、金森建策の(C)図は「谷合四ツ、流川三ツ、干川二ツ、此濱長サ二十丁余但石濱」とほとんど同じとなっている。



(C)図 金森建策の絵図(1)

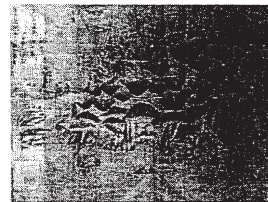
金森建策の「竹嶋之図」(D)図は「竹島関係文書集成」所収の2枚目である。この図は島内が樹木、岩等で余白がない描き方であること、東と西、南と北が直線で結ばれる等方角が多く意識して記載されていること、島周辺の書き込みが「此濱西受、長十五町、谷合一、川一、平地有り奥行不相分」、「岩組谷合四、流川三、此濱長二十丁余、石濱、寅卯方受」と(C)図より八右衛門の(A)図に近い



(D)図 金森建策の絵図(2)

表現が目立つ。金森建策の絵図は後記の(E)図、(F)図も含めて方角の細かい書き込みが特色の一つだが、彼が西洋の度量衡について「遠西秤量尺度考」なる書物も残す方角等にくわしかった為と思われる。また八右衛門は天保7（1836）年竹島渡海が発覚し処刑されており、金森建策の絵図提出の嘉永2年の間隔は14年間という短期間であり、直前に入手した最も新しい絵図を藩主に提出したと思われる。

金森建策の絵図(E)図は鳥取県米子市立郷土歴史館が竹島関係の常設展示のコーナーに掲げられているものである。昭和28年の「山陰日日新聞」が「元和3（1617）年の竹島図発見」として絵図の写真と共に報じている。所有者は佐々木謙氏とあり、すでに故人の竹島の研究者で数々の論文を残された人物の名を記している。元和3年といえば米子町の廻船業者大屋甚吉が竹島（鬱陵島）に漂着した年で200年後の金森建策の絵図が元和期となぜ判断されたかは不明である。この図は金森建策の(C)図に酷似しているが、「自隠岐國七十里而有此島俗号竹嶋是也」とした書き込みが(D)図は西の方角にあるのに対し、(E)図では東の所に書かれていたり、(D)図の隠岐国が、(E)図では隠岐國、(D)図の島が(E)図では島、(E)図で西北西を示す戌の字が欠落しているといった文字上の相違、島内の山の形が(E)図の方が丸みがある等の特色がある。いずれにしても松江藩近隣の地に日本政府等の刻印の全くない金森建策の図が存在した意味で(E)図は貴重であると思う。



(E)図 金森建策の絵図(3)

(F)図は八右衛門の(A)図と共に国立公文書館で船杉委員が発見されたものである。17、18世紀の大谷、村川家の絵図や天保期の八右衛門の絵図とは異なり簡略化された絵図であるが、金森建策の絵図に近い雰囲気もある。図の西の部に大字で「竹嶋之圖」と書かれた外務省図書刻印がある。島内の山の形態は薄青で単純に描かれ、大樹が1本、滝4ヶ所が記されている。



(F)図 金森建策の絵図(4)

それにしても八右衛門の絵図も金森建策の絵図も全て大谷、村川の絵図にある竹島に古くから名付けられている浜田浦、大坂浦のような浦名が記されていないのは不思議である。特に金森建策は絵図の説明書と思える「竹島図説」に浦の名についてくわしく記述しているにもかかわらず図には書いていないというアンバランスがある。なお、「竹島図説」には現在の竹島、当時の松島を隠岐国の所属とする記載がある。

(3) 松浦武四郎の「竹嶋之図」

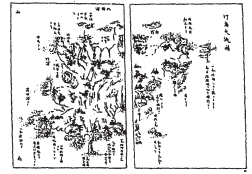
幕末から明治初期に3枚の竹島の図を残した人物に松浦武四郎がいる。松浦武四郎は文政元（1818）年伊勢国一志郡須川村で生れ、16才の時から諸国を回って見聞を広めた。天保7（1836）年には山陰を旅行していることがその「自伝」にあり、月日からみると八右衛門が逮捕された直後であり因縁が感じられる。またこの旅で海上のことを宿屋で尋ねるとあちこちの宿の主人は何度も竹島へ行っている浜田の船頭長兵衛（あるいは長蔵）のことを語ったという。この長兵衛は晩年備中岡山の小原街（こばらまち・こばらは当時佐伯郡父井原、和気郡吉永、赤磐郡赤坂にあり確定出来ない）に居住し、備中で生まれ備前で育った金森建策は「竹島図説」の序文に長兵衛の「口碑」（直接語ったことか語ったことを記録したものかは不明）を利用しており、金森建策と松浦武四郎にも関連する要素が生まれている。松浦武四郎はその後弘化2（1845）年より3度蝦夷に渡り、「蝦夷日誌」その他蝦夷に関する書物・地図を書き安政2（1855）年から幕府の蝦夷御用を務めた。その直前の安政元年10月武四郎は「他計甚麼雑誌」なるものを書いたがその中に載る竹嶋之図が(G)図である。「竹島大概圖」と記された図には八右衛門の天保4年の(A)図に「此小島高百間余廻り凡四拾間」、金森建策の(C)図には「此島百余間、廻り四十間」とある部分が「一本此島三ツニ離レテア



(G)図 「他計甚麼雑誌」の図

り、島百余間廻り四十間許り、」のように若干の変化を持ちながらも同じ内容を継続している。

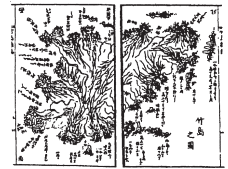
松浦武四郎は続いて題字の文字を「多気甚麼雑誌」と変えて復刻本のような形で本を発行した。巻末に甲子十一月辰六日閱とあり、元治2（1864）年刊行と思われる。武四郎の竹嶋之図は前記の(G)図もこの(H)図も後記の(I)図も島の周辺に浜田浦、大坂浦のような大谷、村川家の絵図にある浦名が記載されている（ただし北浦、古大坂浦はいずれの図にも書かれていない）。図を説明する雑誌の文章も図



(H)図 「多気甚麼雑誌」の図

の浦名と的確に整合性を保ち、図にない北浦、古大坂浦に関する記述はない。文章には武四郎自身の推喩も目立つ。武四郎は参考文献に金森建策の「竹島図説」や「金森建策筆記」（現在残存が不明）をあげるが、例えば金森建策が自然環境だけを記している浜田浦の説明に、武四郎は「按ずるに此辺石州と対峙するが故に、浜田辺より漁者多く此处をさして乗来りしにて此名有るやと思はる。」と自分の考えを述べたりしている。なお(H)図は(G)図と同様に「竹島大概圖」とあり、島の周囲への記入事項も同じであるが島内の描き方が余白もあり見安くなっている。

松浦武四郎は明治2（1869）年から開拓判官に任命され、北海道という道名や北海道内の国、郡名を選定したりしたが、明治政府のアイヌ政策に同調出来ず2年後にはその職を辞した。そうした時期武四郎は序文に明治3年とある題字を「竹島雑誌」とする3回目の冊子を刊行している。



(I)図 「竹島雑誌」の図

この雑誌の絵図は「竹島之圖」とあり、島内の河川のくわしい記入が印象的である。また武四郎の(G)図や(I)図の島周辺への記載に「往古ノ人家跡アリ」等の新しい語句も発見出来る。「竹島之圖」が掲載されているページの前ページには、「日本輿地路程図」（縮写）を掲げ竹島、松島の位置を示している。緯度、経度や竹島のそばに「見高麗猶雲州望隠州」、「一云う磯竹島」の文言もあり、長久保赤水の「改正日本輿地路程図」に似るが簡単な部分図なので細部の比較は困難である。

武四郎は幕末の「他計甚麼雑誌」と「多気甚麼雑誌」のあとがきで「去夏外国船（墨夷赤狄）東西に滯船し国事が杞憂すべき状態にある」、特に「竹島は朝鮮と我が国の間にあり人が居住していないのでここに外国船が集まり山陰の諸港に出没すればその害は少なくない」、逆に「日本の有志の士がかの地に渡り外国船と誠信を通じ世界の情勢を探知すれば得策となることこの上ない」としている。明治初期の「竹島雑誌」では「蝦夷、樺太、伊豆七島等に比して竹島はあまりにも知られていない」ことを執筆の理由としている。

おわりに

八右衛門、金森建策、松浦武四郎の「竹嶋之図」は江戸時代の末期から明治初期にかけての貴重な絵図である。江戸時代初期の大谷家、村川家関係の絵図が漁場、船懸りの場所、浦と浦の距離等を中心に書き込んだ実務型であるのに対し、現在視察に持参しても役立つほど島の形、岩礁の存在場所、島内の山や川等自然環境を細部にわたって記載する近代的で科学的な要素も感じられる。

それにしても浜田の廻船業者八右衛門の書いた絵図が松江藩士や伊勢の学者に受け継がれていた事実は驚異である。松浦武四郎は竹島に関する文章や図を書くのに金森建策のものを参考にしたことを記している。それに対し金森建策は八右衛門のことについて「竹島図説」には全く記述していない。彼には「金森建策筆記」という著書があるとされ、その中に関係する内容の記述がある可能性がありその著の発見が待たれるが、竹島への密航者として逮捕、処刑された八右衛門の名は秘し、その精緻な絵図を自分の名のもとでこの世に残してやった可能性もある。

八右衛門は取調べの時に別に「方角図」という地元の浜田から見た竹島、松島の位置を描いた図を残

している。現代から見てその方角や距離の正確な点は多くの研究者が認めている。藩主の国替えや家老等の切腹を引き起こした八右衛門の行動は別として金森建策に受け継がれていることが今回判明した海に生きた男の「竹嶋之図」は新しい八右衛門の評価を生むに違いない。

参考文献

- 1、八右衛門については、森須和男「八右衛門とその時代」(浜田市教育委員会・2002年)、「浜田町史」(石見史談会・1936年)、矢富巖夫「浜田藩 竹島事件」(新人物往来社・1989年)、「島根県の地名」(石見国浜田藩竹島事件)」(平凡社・1995年)等の著書、論文として森須和男「竹島一件について―甲子夜話を主題にして」(浜田市文化財愛護会「亀山」14号・1984年)、同「竹嶋一件考―八右衛門申口を中心にして―」(「亀山」18号・1991年)、児島俊平「会津屋八右衛門・竹島密貿易事件の真相」(「亀山」13号・1983年)、河田竹夫「橋本三平と会津屋八右衛門」(「亀山」14号・1984年)、桑原韶一「竹島事件を考える」(「亀山」15号)、三上巖「竹島一件聞覚書について」(「郷土石見」8号・1978年)
- 2、金森建策については、「竹島図説」(「竹島関係文書」所収・エムティ出版・1996年)「新番組列士録」(島根県立図書館所蔵)、松浦武四郎の3種類の「竹島雑誌」、「新修 松江市誌」(松江市・1963年)、「島根県歴史人物事典」(山陰中央新報社・1999年)
- 3、松浦武四郎については、「他計甚麼雑誌」(「松浦武四郎全集」所収・松浦武四郎伝刊行会1967年)、「多気甚麼雑誌」(「竹島関係文書」所収)、「竹島雑誌」(「竹島関係文書」所収)、吉田武三「人物叢書142 松浦武四郎」(吉川弘文館・1967年)、更科源藏「日本の旅 松浦武四郎―蝦夷への照射―」(淡交社・1973年)、「日本歴史大辞典8」(河出書房新社・1987年)
- 4、大谷家、村川家の「竹島之絵図」については、塚本孝「竹島関係旧鳥取藩文書および絵図(上)」(国立国会図書館調査立法考査局「レファレンス」411号・1985年)、「同(下)」(412号・1985年)